

# THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES 親鸞仏教センター通信

2025年4月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0034 東京都文京区湯島2-19-11

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail [shinran-bc@higashihonganji.or.jp](mailto:shinran-bc@higashihonganji.or.jp)

ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

Facebook [http://facebook.com/shinran\\_bc](http://facebook.com/shinran_bc)

X (旧Twitter) [https://twitter.com/shinran\\_bc](https://twitter.com/shinran_bc)

2025.04

第90号

## 哀しみと悲しみ

親鸞仏教センター副所長 加来 雄之

「人間がこんなに哀しいのに 主よ 海があまりに碧いのです」。

これは遠藤周作(1923-1996)が「沈黙の碑」(長崎県外海地区出津文化村内)のために作った言葉である。「海」の碧さは、人間の感情の及ばない世界の静寂さを暗示しているのだろうか。

現代が危機の時代であることを否定する人はいないだろう。しかし現代だけが危機ではない。「今こそ危機である」と喚起する声はいつの世にもあった。そして真の危機はその危機の本質を見た人にもみ実在する。

『大無量寿経』(以下、『大経』)の釈迦如来からすれば、こんなにも哀しい人間を悲しむことができないことが人間にとっての真の危機なのであろう。『大経』には、「悲」とともに「哀」という字が多く出現し、「矜哀」、「哀愍」と熟語される。この経は「かなしみ」という心情に貫かれている。この経に、「如来、無蓋の大悲を以て三界を矜哀したまう」(『真宗聖典』初版8頁、第2版8頁)とある。釈迦が、こんなにも哀しい人間のありかたを無底の深みから担おうとするのは、「大悲」、如来の悲しみ(カルナー)によるのだと教えている。

如来の大悲は、人間的な関心や属性にはあまりにも無縁である。なぜなら、如来の大悲は、人間のいかなる哀しみもはからいも届かない寂靜の

「広海」(同212頁)に根をもつからである。人間の哀しみという契機を通さなければ、如来の大悲にふれることはできないが、また大悲に裏づけられなければ、私たちは人間の哀しみを釈尊のように如実に矜哀することはできないだろう。

釈迦をして人間を矜哀させた大悲の心を、曾我量深(1875-1971)は「法蔵魂」と呼んだ。安田理深(1900-1982)は、「人生に於て如何なる安価な夢も見ず、如何なる悲慘にも絶望しない。この法蔵魂を衆生に解放するのが念仏である」(『安田理深選集』第1巻、211頁)という。こんなにも哀しい人間の世を、楽観もせず悲観もせず、如実に生きる世界。そのような世界への信念を実現するために、『大経』は、私たちに法蔵魂を説くのである。

この世には、さまざまなかたちで人間の哀しみを凝視し、危機を担おうとする人々が存在している。危機を叫んだ人々はいつも、「余計なお世話だ」と罵倒され、「あまりにも悲観的だ」と嘲笑され、多く省みられることがなかった。少なくとも、私はこの人々を嘲笑する側に与しないでことう。私は、かなしみを忘れて生活が浮つかないように、人間の哀しさを学び続ける場に、また大悲の眼差しがはたらく場に、みずからの身を置くことに努めていきたい。

## 本願自身が身になる

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



当センター所長・本多弘之による連続講座「親鸞思想の解明」では、「本願力回向の行信—『一念多念文意』を読み解く—」と題して、親鸞の『一念多念文意』を拝読している。ここでは、その第17回の一部を紹介する。

(親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一)

『一念多念文意』で親鸞聖人は、善導大師の「致使凡夫念即生」(『真宗聖典』初版544頁、東本願寺出版)の「念」について、「念」は如来の御ちかひをふたごころなく信ずるをいうなり(同上)とされています。

分別という言葉がありますけれども、人間の意識が起こるといことは、分かれが起こる。自分があって対象がある、思われる内容と思う自分というものがあるというふうな。そういう割れている心のままに何かこう外なる如来のお言葉を信じようとする、そこに分別心が生じてくる。そういう心が起こっていると、我々は「ふたごころ」を離れることができない。だから、本願を、本願という対象のごとくに言って、その対象のごときものを信ずる場合には、その信はやはり「ふたごころ」でしかない。

だから、本願自身が凡夫の方に入ってくるような形で本願になるような心、本願が我々になると言いますか、そういうことが起こった場合、「一心」、ひとつ心だと。こういう心を、親鸞聖人は、本願力成就の信心としていただくことができた。だから、本願力が成就するのであって、自分の凡夫心が、ふたごころのままに純粹になるなどということはありません。ありえないのだけれど、そういう者にも与えずんばやまん、という本願力が、

必ず本願力の側からは成就するのだと。その場合の「念」は、時の中にあって時を超えるような事実。こういう意味で親鸞聖人は、この「念」を理解しようとしておられる。

だから、本願を信じるということは、信ずるとい形で本願を生きることが成り立つということです。親鸞聖人は、外にある本願を説明しているのではなくて、本願を生きておられるわけです。本願を生きておられるから、生きておられる内容というのは、これは譬えですけれど、外にあった食事を食べて、それがエネルギーになる、そういうように、外にあるものが内になる。本願は教えとして外にあるけれど、外にあるものが内になることが起こるわけです。外にあるものはずっと外にあるだろうというのは、分別で考えているわけです。分別で考えた外の食事、それは栄養になりませんよね。食べて初めて栄養になる。そういう意味で言えば、信ずるといことは、食事を食べるように身になるわけです。身になることが起こることが、この「念」の事実なのです。これは、何とも言えない不思議なことだと思うのです。

本願と凡夫は分かれているわけだけれども、本願からすれば凡夫は本願の内にある。十方衆生よ、と呼びかける本願の中に入っているわけですから。それなのに、凡夫が外にある本願を信ずると言っている限りは、それはふたごころです。それが、本願を本当に信じていることができる、本願自身が身になる、こういうことが起こるといことは、本願力が凡夫に成就するということです。それは決して凡夫が本願を取り入れて自分で立ち上がるわけではない。本願自身が立ち上がってくる。そういうふうな言うしかないような事実が起こるのです。

## 戦後歴史学と宗教研究 —教科書からこぼれおちたものを 「民衆」・「宗教」からみる—

親鸞仏教センター嘱託研究員 飯島 孝良



今回のシンポジウムは、「戦後歴史学と宗教研究—教科書からこぼれおちたものを「民衆」・「宗教」からみる—」と題した。というのも、戦後の歴史学者が戦前の「国家」「天皇」中心の歴史観を反省する際、「民衆」や「宗教」に着目することがみられたからである。

登壇者間で共通した認識として、教科書の規範的な記述のなかで文化や宗教は中心からは追いやられがちであるが、むしろ戦後は文化や宗教こそが「民衆」の姿を描く上で重要な材料だともみられたのではないかと、という問いがあった。そこで、禅文化史(飯島)・近代史における親鸞とマルクス主義(本願寺史料研究所の近藤俊太郎氏)・近代民衆思想史(繁田真爾研究員)の三つの視点から報告し、これに対して、ディスカッサントとして近代日本の軍事史や政治史の研究で活躍されている東京大学の加藤陽子氏からコメントを頂くこととなった。

飯島の「芳賀幸四郎からみる戦中／戦後の仏教史(禅文化史)を手がかりに」では、昭和初期まで「東山文化」が大陸文化をむやみに享受し公家文化を害するものと低く評価されたことが指摘された。これに比べて芳賀は「東山文化」を高く評価しており、外来文化を巧みに取り入れつつ、「民」が技芸で下剋上の台頭してきたこと—さらには戦後の民主主義と価値観を共にしていたこと—に着目していた点が論じられた。

また、近藤氏の「服部之總の親鸞・蓮如論が問いかけるもの—戦後日本宗教史研究の一断面」では、親鸞を護国思想的に解釈してきた戦時下の歴史観との対決を試みた服部が、農民とともにある親鸞を描き出そうとした点が指摘された。そしてそれは、戦後日本という歴史的条件のもとで、民衆が

担う積極的役割があることを確認するものであったと述べられた。

さらに、繁田研究員の「安丸良夫の民衆史研究が問いかけるもの—歴史研究と宗教史研究の対話のために」では、民衆思想史家の安丸が「宗教」に注目したのは、近代化していく社会を「宗教」を通して深層から見つめようとしたためと論じられた。安丸民衆史は、「世俗の権威から自立した別の原理」を宗教にみようとするとともに、もし歴史研究が近代社会の現象的な分析・記述の範囲を出なければ、それが現状追認的な保守主義に結果しやすいことに警鐘を鳴らしたものと分析された。

加藤氏のコメントでは、芳賀の戦時中のアジア文化史観と、1942年頃から文部省が編纂しようとした『大東亜史概説』(未完)には、〈外来文化を巧みに受容しながら日本独自の歴史と文化を形成した〉という点で共通する意識があったのではないかと、という指摘があった。つまり、禅文化は戦前と戦後で共通した枠組から「大東亜共栄圏」的にも「民主」的にも読み解かれることがあり得たということであり、これは親鸞が護国的にも民主的にも読まれ得ると服部が指摘した点とも共通してくる。また加藤氏は、親鸞思想が天皇制打倒を目指すマルクス主義的な動向と結びつき得たことに着目され、安丸民衆史において戦前の公共圏で中心となっていた天皇を相対化する動性として当時の寺院が位置付けられていた点を指摘された。「戦後歴史学」では忌避されて十分に議論されてこなかった「宗教」「仏教」というモチーフに着目することが、歴史学と宗教史研究という両者の知見を共有し橋渡ししていく第一歩となるように感じられた。

## 「教える」という 営みの豊かさを探る

2023年4月に常勤研究員として着任した当初より、「宗教と教育」研究会を開催している。「公教育における宗教の可能性と課題を考える」を趣旨とする本研究会は、約1年半にわたり第14回まで実施してきた。以下、本研究会の趣旨をより多くの人と共有するため、その根本的な関心を整理するとともに、これまでの研究活動について報告する。

（親鸞仏教センター研究員 徳田 安津樹）

### 「教育」と「宗教」

本研究会の根本的な関心は、「教える」という営みに注目し、それが本来もっている多義性や豊かさを探ることを通して、「教育」と「宗教」についてわれわれが抱いている認識を拡げていくことにある。例えば、真宗大谷派ではしばしば「教化者意識」に対する警戒が説かれており、「上から目線」で教え込もうとする意識が教化者に付きまとうことへの自覚が促されている。このような取り組みはもっともと思われるが、本研究会が課題としたいのは、こうした意識が生まれる背景として、そもそも、われわれが「教える」ことについてもっているイメージが狭すぎるといえるのではないか、という問題である。

現代において「教育」と言えば、学校教育、とりわけ特定の技能をもった教員が、なかば教条的な仕方で生徒に知識を伝達する光景が想起され、われわれはそれを教育の基本モデルと見なしているように思われる。しかしこうした教育観は、「教える」という営みのごく一側面を切り取ったものに過ぎず、実際には多様で多義的であるはずの教育を矮小化してしまっている。

本研究会は、こうした価値観に揺さぶりをかけるものとして、宗教における「教える」の営みに注目する。政教分離の原則のもと、「教育」と「宗



教」は無関係なものと思えられがちであるが、実際には多くの宗教者もまた、広い意味において、学校教職員と同じように「教える」ことを使命とし、しかもそれを、公教育とは異なる仕方で行っている、あるいは実行してきたのである。

### 宗教教育に見る「教える」の可能性

このような関心に基づいて、本研究会は、学校で行われている宗教教育にフォーカスを当て、「教育」と「宗教」が交差する現場において、「教える」という営みがどのような動態を示しているのかを明らかにすることを目指しており、その具体的な事例として、真宗大谷派の宗教教育について多角的な研究を行っている。

これまでの主な活動としては、①真宗大谷派の関係学校に訪問し、教職員へのインタビュー調査を通して、現場のリアルな状況のなかで宗教教育がどのように働いているのかを検討するとともに、②過去の宗教教育に関わる資料（例えば、記念誌などの刊行物や、学校や関係者宅の保存資料）を収集・閲覧し、歴史的な視座から宗教教育が果たした役割を分析している。また、③ご厚意により、真宗大谷派学校連合会が主催する研修会にも参加させていただき、教職員の方々との交流のなかで、真宗教育の真髄を少しずつ学ばせていただいている。関係者の皆様にはこの場を借りて厚く御礼を申し上げたい。

以上の活動から見てきたのは、宗教教育もまた多様であり、そして様々な要素によって醸成された学校独自の文化のなかで教育が実現していることである。今後も引き続き「教える」という営みの可能性を掘り起こし、教育の別様のあり方を模索していきたい。

### 近現代『教行信証』研究検証プロジェクト

#### プロジェクトメンバー座談会

## 「近現代『教行信証』研究の 「これまで」と「これから」所感

親鸞仏教センター研究員 大胡 高輝

2024年9月5日、近現代『教行信証』研究検証プロジェクトの特別企画として、プロジェクトメンバーによる座談会「近現代『教行信証』研究の「これまで」と「これから」」が開催された（企画担当・筆者）。本座談会は、当プロジェクトが2025年に設置10年目の節目を迎えることを承けて、あらためてプロジェクトのこれまでの研究成果と今後の展望・課題をプロジェクトメンバー間で共有すること、またプロジェクトの研究成果を研究分野間の垣根や学術研究内外の境界を超えて広く人々と共有することを目指したものである。当日は筆者司会のもと、プロジェクト設立理念の振り返り（本多弘之所長〔プロジェクトリーダー〕）、プロジェクトの研究成果および今後の展望・課題の整理（青柳英司嘱託研究員〔同チーフ〕・名和達宣嘱託研究員〔同メンバー・教学研究所所員〕・藤原智嘱託研究員〔同メンバー・教学研究所研究員〕）を行い、その後、青柳・名和・藤原各氏に対する問題提起（加来雄之副所長〔同アドバイザー〕）を足がかりとして、上記6名による座談会を実施した。

当日の議論の詳細については、2025年3月刊行予定の『近現代『教行信証』研究検証プロジェクト研究紀要』第8号所収の記録記事「近現代『教行信証』研究の「これまで」と「これから」一序・創造的解釈・親鸞像—」をご参照いただくとして、ここでは以下、座談会に出席して感じた事柄を記すこととしたい。

近現代『教行信証』研究検証プロジェクトは、100年以上にわたって宗門の内外で広く読み継がれてきた『教行信証』解説書である山辺習学・赤沼智善『教行信証講義』（1913-1916年）に替わる新たな解説書が長らく刊行されていない現状に



に対する問題意識を背景として、近現代における『教行信証』研究の内実を検証するとともに、その検証結果をふまえて『教行信証』の現代的表現を探求してゆく研究プロジェクトである。今回の座談会では、こうしたプロジェクトの趣旨をふまえて、意識したいテーマとして①現代においてどのように『教行信証』を読んでゆくのかという方法の問題、また②近年思想史・仏教史研究でも注目されているトピックである親鸞像についてどのようにアプローチしてゆくのかという親鸞像の問題が掲げられたが、当日はとりわけ前者の方法の問題をめぐって議論が活発に展開され、具体的には、プロジェクト第3期の主題でもある『教行信証』の序（「総序」「別序」「後序」）と方法との関係、また近年名和研究員が精力的に考究している方法である「創造的解釈」の内実が焦点となった。

座談で展開された議論は多岐にわたっていたが、筆者の記憶に強く残った場面の一つを挙げれば、それは実証的な諸学の知見抜きには致命的な誤読が生じかねないという問題意識から「『教行信証』だけを見ていて『教行信証』が読めるのか」と問う青柳研究員と、「僕は、『教行信証』というテキストは、青柳さんのその危惧もふまえて書かれている、展開している著作であると感じています」と語る加来副所長との応酬であった。倫理学的立場からテキスト内在的な読解を目指しながらも、自分の読解がいつもテキストから遊離しているという感触が消えない筆者にとって、その「危惧」を乗り越えるための原理が『教行信証』そのものに内包されているという可能性は、非常に興味深く感じられた。またプロジェクト全体にとっても、この可能性は今後さらなる考究が待たれる論点の一つとなるように思われた。

問題提起

「正信偈」の銘文の三回目は、親鸞が、「能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃 凡聖逆誘齊回入 如衆水入海一味」という四句を解説した部分に焦点を当てる。親鸞は、そのはじめに「喜・「よろこび」について記している。ここで、親鸞が展開する「慶喜」とは、一体どういう「よろこび」なのだろうか。

親鸞が、「慶喜」というのは、信をえてのちよろこぶことをいうなり」と定義する通り、それは、私たちが本願の名号のいわれを聞くことを通して、信心を獲得した後の「よろこび」なのである。また親鸞は、「正信念仏偈」において、「能発 念喜愛心」の「愛」の字に「ミス（嘉す）」「メクム（患む）」と訓を付けている。「嘉す」とは、「目上の者が目下の者を愛でたえる」という位置を持つ言葉であると言われている。つまり、

この「愛」は「如来の側から衆生の側への愛」をあらわしているのだろう。関連して、「慶（喜）」という言葉の典拠であると思われる「大無量寿経」の文には、仏法を聞いて慶ぶ者を仏陀釈尊が「我が善き友」であるとはめたたえてくださっている、と示されている（東本願寺出版、『真宗聖典』「以下、『聖典』」初版五〇、五一頁、第二版五四頁、取意。善導の『観経疏』「二河白道の譬喩」では、「善友あい見て慶樂すること已むことなからんがごとし」『聖典』初版二〇〇頁、第二版二四八頁）と示され、白道を歩む信心の行者が、西岸の阿弥陀仏の浄土に到り着き、善き友と出会って、お互いに慶び合っている相が表現されている。つまり、「慶喜」という「よろこび」は、信心を獲得した者が、阿弥陀仏の浄土に生まれて、仏道に導き入れてくださ

る諸仏、善知識、善き友に出会う「よろこび」であると言えるだろう。そしてその「よろこび」は、信心を獲得した者、一人一人の「よろこび」であるが、同時に、むこう側・如来の側も「一緒に喜んでくださっている。その如来の側の重く深い愛を受けることが、一人一人が仏道を歩んでいく上で、大きな「よろこび」に励ましになっている。そういう質の「よろこび」なのだと思われるのである。

曰頃、私たちは、自分個人の努力意識によって、喜びは得られるものだと考えている節がある。しかし、決してそれだけではない、大いなる「よろこび」というものがあることを、親鸞はここで、教え伝えようとしているのではないだろうか。

（親鸞仏教センター囁託研究員 菊池弘宣）

【原文】

和朝愚禿釈の親鸞が『正信偈』の文

「本願名号正定業 至信心樂願為因 成等覺証大涅槃 必至滅度願成就 如来所以興出世 唯説弥陀本願海 五濁惡時群生海 応信如来如実言 能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃 凡聖逆誘齊回入 如衆水入海一味 撰取心光常照護 已能雖破無間貪愛瞋憎之雲霧 常覆真信心天 譬如日光覆雲霧 雲霧之下明無闇 獲信見敬得大慶 即横超截五惡趣」文（中略）※中略部分は「親鸞仏教センター通信」第八十八号、第八十九号に掲載

「能発一念喜愛心」というのは、能はよくという、発はおこすという、ひらくという。

【現代語】

「和国」の愚禿釈の親鸞の『正信偈』の文 ※銘文の全文は略する。

（中略）※原文参照

「能発一念喜愛心」というのは、「能」は「できる」ということ、能動性である。「発」は「おこす」ということ、「ひらく」ということである。

「一念喜愛心」とは、一念に慶喜がともなう真実信心が開き、必然的に阿弥陀如来の本願が成就した真実報土に生まれていると知るべきである。「慶喜」というのは、信心を獲得した後によるこぶ心というのである。

一念喜愛心は、一念慶喜の真実信心よくひらけ、かならず本願の実報土にうまるとするべし。慶喜というは、信をえてのちよろこぶころをいうなり。「不断煩惱得涅槃」というのは、不断煩惱は、煩惱をたちすてずしてという。得涅槃ともうすは、無上大涅槃をささるるをうるとするべし。「凡聖逆誘齊回入」というのは、小聖・凡夫・五逆・謗法・無戒・闡提みな回心して、真実信心海に帰入しぬれば、衆水の海にいらて、ひとつあじわいとなるがごとしとたとえたるなり。これを「如衆水入海一味」というなり。

《語註》

小聖…「大聖」（仏陀釈尊）と対になる言葉。声聞・縁覚の教えを依りどころとする者。および菩薩道を自力の心によって歩む聖者のこと。

闡提…一闡提の略称。強欲、断善根、信不具足と訳す。仏法を全く信じる心がない者のこと。

現代語化をめぐって

親鸞は、「凡聖逆誘齊回入」の一句について、「小聖・凡夫・五逆・謗法・無戒・闡提みな回心して、真実信心海に帰入しぬれば」と解説している。ここでは、「小聖」以下の並び順に着目し、とりわけ「無戒」の位置に焦点を当てて、「無戒」が何を意味しているのかを尋ねたい。

通常の仏教では、「無戒」とは、「授戒を受けていない者」を意味するのであろう。しかし親鸞は、当銘文において「凡聖逆誘」の「逆誘」の意を開き、「五逆」「謗法・「闡提」の間に「無戒」を入れている。また親鸞は、先に見た「聖覚和尚の銘文」の解説部分には、「破戒」と「罪業ふかきもの」の間に「無戒の人」という言葉を差し挟んでいる（『聖典』初版五三〇頁、第二版六四八頁参照。つまり親鸞は、「戒律を破る」という「破戒」の意を受けつつ、「無戒」を「罪の根が深いもの」という位置で

とらえているのだと思われる。

一方で親鸞は、「教行信証」「化身土巻・本巻」に最澄製作とされる『末法燈明記』を引用している。親鸞自身、正像末の三時教の経説にしたがって、「す」でに戒法なし（『聖典』初版三六二頁、第二版四二六頁）という『末法燈明記』の言葉を念頭に置き、「仏涅槃の後、無戒洲に満たん（同前）という仏説（『大集経』）が示す「無戒」の本意を、前述した各銘文の解説を通して、明らかにしようとしているようにも思われるのである。

すなわち、親鸞は、「戒律の法が成り立たない末法の時代を生きる身の事実」を、当銘文において「無戒」として示し、「末法の無戒」という位置を表現しようとしているのではないか。それはつまり、「五濁惡世」が深まり、無明・煩惱が増長する中、「仏法の規範から外れ

「不断煩惱得涅槃」というのは、「不断煩惱」とは煩惱を断ち捨てないままでということである。「得涅槃」と申すのは、煩惱具足の凡夫という自覚において、仏のこの上ない大いなる涅槃というさとりのはたらきをわが身に受けとめる、と知るべきである。「凡聖逆誘齊回入」というのは、声聞・縁覚の教えを依りどころとする者、および菩薩道を自力の心によって歩む聖者、煩惱を欠け目なく備え迷っている者、五逆罪を犯す者、正しい仏法の教えをそしめる者、戒律の法が成り立たない末法の世の身の事実を生きる者、仏法を全く信じる心がない者、そのような様々なものたちが皆、自力の心をひるがえして、真実信心という大海原に入ると、皆同じく等しく救われていくということである。それを、あらゆる川の水が大海原に流れ入って、一つの味わいとなるようなものであるとたとえているのである。この事実を「如衆水入海一味」というのである。

て罪深い生活をしていながら、そのことにすら気づけなくなっている在り方」を指す言葉なのではないだろうか。

しかし親鸞は、そういう「末法の無戒」も「回心してこそ、救われるのだ」と記している。「回心」すなわち、阿弥陀如来の本願力のはたらきに帰することによって、「小聖」以下「闡提」までが皆、その救いのはたらきに包まれていくと見定めているのである。そのもとは、「末法の無戒」という在り方に痛みを持つ、いわば「目覚としての無戒」ということがあるのではなからうか。

その「末法の無戒」とは他でもない、現代に生きる、本願念仏の仏法のもとにある、私たち一人ひとりの在り方を指し示しているのにながらない。

## 「近現代の真宗をめぐる人々」第22回

あんどまきずみ  
安藤正純 (1876～1955)

井上円了 (1858～1919) の研究者である私にとって、哲学館 (現東洋大学) 出身で政治家としても活躍した安藤正純は気になる存在である。政治家としての安藤については、戦時期の翼賛議員連盟に反対して鳩山一郎とともに「同交会」を結成するなど、議会政治を重視した立場が目立っているようだ。しかし政治に取り組んだ仏教者という側面に関して言えば、まだ十分に論じられてはいない。

浅草真龍寺の長男として生まれた安藤は、大谷派の東京教校で学んだ後、井上が創設した哲学館に入学した。卒業後は『明教新誌』や政教社の新聞『日本』、『東京朝日新聞』等でジャーナリストとして活動した。その一方で白川党の改革運動に参加し、また浅草近辺の貧しい子女のための学校を真龍寺で開くなどの仏教社会事業にも取り組んだ。そしてこれらの経験を経て、彼は政治の道へと進んでいく。国会議員として宗教団体の成立や仏教各宗派の再編・統一などに取り組んだ安藤にとって、仏教と政治の関わりは大きな課題のひとつであった。いわば政治を通して現実の仏教界に働きかけることで、日本仏教の改革を促すことを安藤は目指していたようである。

この点については、とりわけ哲学館事件後に政府と明確な距離をとった井上と好対照をなして興味深い。両者はいずれも諸宗派が主体となっていた従来の仏教界の改革を目指したが、それぞれが宗門から距離を取りながら (より正確には還俗しながら)、井上は民間の一個人



出典：国立国会図書館「近代日本人の肖像」  
(<https://www.ndl.go.jp/portrait/>)

として、そして安藤は政治家として、同様の課題に取り組んだと言えるのではないだろうか。  
(長谷川 琢哉)

定例講座「『歎異抄』思想の解明」  
第Ⅲ期がスタート！

加来雄之副所長による定例講座「『歎異抄』思想の解明」は、2025年1月より第Ⅲ期が開始しました。

〈趣旨文〉一部抜粋

『歎異抄』は、親鸞の直弟子によって記され、親鸞の生き活きとした語りを伝える書として有名な書物です。

この講座では、親鸞の言葉が現代の危機的な状況の中でどのようなリアリティをもつのか、また親鸞の言葉を相続していくとはどのような営みであるのか、これらの課題をもって、『歎異抄』思想がもつ現代的意義を聴講者の皆さんと共に解き明かしていきます。

この度の第Ⅲ期では、『歎異抄』の本文の第四章から第六章までを拝読します。第四章以降は起行 (きぎょう) を表わす訓 (おし) えと位置づけることができます。起行とは、安心にもとづいた生活を意味します。とくに第四章から第六章には、安心に立つものがどのように他者に関わるのかについての仰せが記されています。

たとえば、慈悲とは念仏していそぎ仏になって衆生をすくうことである (第四章)、親鸞は父母の孝養のために一返も念仏したことはない (第五章)、親鸞は弟子を一人ももっていない (第六章) など、他者との関わり方を問い直してくる印象的な語りが出てきます。

この第Ⅲ期での学びを、私たちの自我関心に立った他者との関わり方を問い直す機会にできればと思っています。

※全文はホームページにて公開。

「『歎異抄』思想の解明」はオンラインによる聴講も受け付けております。詳細はホームページをご覧ください。その他の公開講座についてもホームページでお知らせしております。



## 出版情報

雑誌『アンジャリ』第44号  
(2024年12月発行)

特集テーマ  
〈動物〉から問われる〈人間〉

